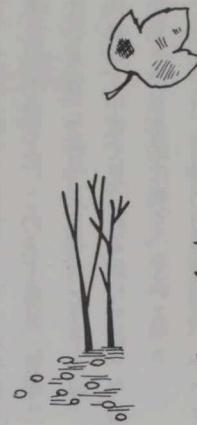


ビーバーを追つて



の根元に、やわらかい綿毛が密生している。そのため、ビーバーの毛皮に対する需要が高まり、その主要な生息地である北米大陸は急に探検家や商人の間で脚光を浴びるようになる。

毛皮の取り引きは、当初、セント・ローレンス川およびその支流周辺のアルゴンキン・インディアンとフランス商人との間で行われていた。フランスは、毛皮貿易の基地として、すでに一六〇五年にポート・ロイヤル（現在のノバ・スコシア州アーノボリス・ロイヤル）に、一六〇八年にはケベックに植民地を建設していた

カルチエのカナダ寄港よりはるか以前から、セント・ローレンス湾一帯ではフランス人漁夫がタラ漁に従事していた。

彼らは、インディアンから鉄などと引き換えにビーバーの毛皮をもらい、それをフランスに持ち帰った。そのビーバーの毛皮は、その後のカナダの歴史を大きく書き変えることになる。

カルチエが、ビーバーを追つて西へ、そして北へと突き進んでいった探検家や貿易商たちによって開拓されたというだけではない。ビーバーは、カナダにおけるフランスとイギリス、そしてさらにインディアンの運命を左右する役割をも演じたのである。

カルチエがカナダを去つてからおよそ六十年も過ぎた十六世紀の末頃になつて、ヨーロッパでは、貴族など上流階級の間でフェルト帽（シルクハット）が流行した。ビーバーの体は、針のような長い毛

にとどまつた事実からも察せられよう。さて、毛皮貿易はどういう風になりたつていただろうか。

当時、セント・ローレンス川流域に住んでいたのは、アルゴンキン族のインディアンであった。彼らは狩猟を営む漂浪の民で、木と獸骨で作った弓矢やワナを用いて動物をしとめ、肉は食料に、毛皮は衣服に利用していた。

その彼らがヨーロッパ人と初めて接触したとき、彼らは自分たちが提供できる唯一の品物である毛皮と毛皮で作った服を、ヨーロッパの品々、特に最も欲しがっていた鉄と交換した。それが毛皮貿易の始まりである。ヨーロッパでビーバーの毛皮に対する需要が急速に高まるとともに、この物々交換もだんだん規模が大きくなり、貿易地域も広がっていく。

そこで、国王は裕福な貴族や商人に対し、植民地を建設するなどの条件と引き換えに、特定の地域内で土地を所有し、税金を徴収し、治安を維持し、かつ貿易を独占する権利（特許）を与えた。ところが、植民をすれば金がかかるだけでなく、ビーバーの生息地を狹めることになるため、これらの貴族や商人たちの会社は毛皮取り引きだけに熱中する。

フランスは、当初から民間にカナダ植民地の経営をまかせ、その民間業者は新

植民地の定住・開拓よりも、目の前の利益を追うことだけに興味を示したのである。

そのことは、カルチエがケベックやモントリオールに達した一五三五年からおよそ百年たつた一六四一年になつても、カナダの全白人人口がわずか三百人程度

「カナダ」

インディアン語からきた

「カナダ」という名前は、「集落」を意味するイロクォイ族インディアンの「カナタ」または「カナツタ」という言葉に由来するといわれている。

一五三四年にセント・ローレンス川を通つてスタダコーナというインディアンの部落（今日のケベック市）に達したフランスの探検家ジヤック・カルチエは、インディアンの酋長からこの言葉を聞いて、國の名前だと勘違いしたららしい。

カルチエが航海記（一五三五年）の中で書いた「カナダ」は、セント・ローレンス川流域のほんの一部を指すだけであつた。しかしやがてセント・ローレンス川一帯を意味するようになり、フランスがケベックに植民地ニュー・フランスを建設した頃になると、ニュー・フランス全体が一般的にはカナダと呼ばれ、そこで生まれた人々はカナディアンと称されていた。

英國がニュー・フランスを征服したあと、フランス系住民だけが「カナダ人」と呼ばれたが、だんだん英系住民を含めたすべての住民を指すようになつた。

カルチエがカナダを去つてからおよそ六十年も過ぎた十六世紀の末頃になつて、ヨーロッパでは、貴族など上流階級の間でフェルト帽（シルクハット）が流行した。ビーバーの体は、針のような長い毛